



TITLE:

洪武から永樂へ：初期明朝政權の性格

AUTHOR(S):

宮崎, 市定

CITATION:

宮崎, 市定. 洪武から永樂へ：初期明朝政權の性格. 東洋史研究 1969, 27(4): 363-385

ISSUE DATE:

1969-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/152785>

RIGHT:

東洋史研究

第二十七卷 第四號 昭和四十四年三月發行

洪武から永樂へ

——初期明朝政權の性格——

宮 崎 市 定

- 一 元・明革命の印象と現實
- 二 元・明革命中の連續性
- 三 太祖の政策における元・明の斷絶
- 四 永樂帝政治の回歸性
- 五 結論と餘論

一 元・明革命の印象と現實

元・明の交替は民族革命の代表的な例として、屢々辛亥革命と比較される。すなわち一はモンゴル征服王朝を北方に驅逐し、他は滿洲族出身の清朝を打倒し、何れもその結果として中國民族の自由を恢復した革命だったからである。併しながら仔細に觀察すると兩者の間には、相當大きな差違も存在することを認めないわけにはいかない。それは辛亥革命は最初から民族革命を意識した運動による成果であったが、元・明革命のほうは、その點が甚だすっきりしないのである。

元・明交替の民族革命的な性質を強調する立場に立つさい、いつも引用されるのは、明の太祖洪武實錄卷二六、洪武二年二月壬子の條の記載である。

詔して衣冠を復すること唐制の如くならしむ。初め元の世祖は朔漠より起りて、以て天下を有す。悉く胡俗を以て中國の制を變易す。士庶みな辮髮椎髻、深襟の胡帽。衣服は勝褶窄袖及び辮線腰褶をなし、婦女は窄袖の短衣を衣、下に裙裳を服し、復た中國衣冠の舊なし。甚しければ其の姓氏を易えて胡名となし、胡語を習う。俗化既に久しく恬として恠しむを知らず。上久しくこれを厭う。是に至り悉く命じて衣冠を復して唐制の如くならしむ。士民みな頂に束髮し、官は則ち烏紗の帽、圓領の袍、束帶黑靴（中略）。其の辮髮椎髻、胡服胡語胡姓は一切禁止し、斟酌損益すること、みな聖心より斷じたり。是において百有餘年の胡俗、悉く中國の舊に復せり矣。

この一節は何孟春の餘冬序錄摘抄に殆どそのまま引用されているので、明實錄が印刷發行される前から、我々も容易に知ることを得た事實である。ところでこの記事から、我々は明朝廷當局者が初めから攘夷的な敵愾心を征服者元王朝に對して抱いていたように感じ取ることができない。これが清代の場合だと、たとえ失敗に終つたとしても、太平天國は堂々と檄をとばして征服者の罪惡を數えて、俱に天を戴かざる仇敵ときめつけているが、明朝興起の場合はどうも様子が違うのである。

だいいち、この詔の發せられた日付が問題になる。それは太祖が即位した洪武元年ではあるが正月元日ではなく、二月十一日という中途半端な日である。これはこの詔が肇國の大方針として宣言されたものではなく、單に禮制の問題として、極めて事務的に片付けられたことを示すものに外ならない。更に洪武元年とは、實は太祖が郭子興に身を投じた壬辰（一二三二）から數えて實に十七年目に當る。そんならいいこの長い間、太祖は元王朝をどう考えていたであらうか。

この間に答えるために、極めて注意すべき一事實がある。太祖が即位の前年（一二三六七年）、蘇州の張士誠を平げた際、

元の宗室神保大王、及び黑漢等九人を捕虜としたが、そのまま放免して大都へ還してやった。その時持參させた元の順帝あての書面に

先には天が金宋を棄てしとき、曆數は殿下の祖宗にありたり。故に韃靼部落をもつて事を沙漠に起し、中國に入りて民に主となる。傳えて百年に及び殿下に至る。海内兵興り、豪傑紛起し、中原を擾亂す。邑里蕭條とし、たとい遺民あるも、また朝秦暮楚の時に處る。民庶の安からざる、已に十七載なり矣。予の如き者も、父母は元初天下を定むる時に生る。彼の時、法度嚴明にして愚頑をして威に畏れ徳を懷わしむ。強も弱を凌がず、衆も寡に暴ならず。民にありては父父たり、子子たり、夫夫たり、婦婦たり。各その生に安んじ、恵みこれより大なるはなし。古は帝王混一するも中原に止まり、四夷を治めず。惟だ殿下の祖宗は四海内外、殊方異類も盡く土疆となる。亙古に無きところなり。豈に意わんや、辛卯の年、妖人横起し、三年にもならざる間、四海内外、勢い瓦解の如し。殿下屢々嘗て將に命じて征伐するも、國勢日に衰え、妖氣愈々盛んなり（中略）。これ蓋し殿下、祖宗の爲す所を體する能わず、故に天將にこれを棄てんとすること、金・宋を棄てし時の如く、事救うべからず。予はもと庶民、亂に因りて兵を起し、郷里を保障す。官軍隔絶し、遂に衆の推戴する所となる。數年以來、衆を輯め、江東・兩浙・湖湘・兩淮・漢沔・江西・嶺廣を撫育し、人生理に安んぜり（中略）。——傍點著者——

とあり、これはどう讀んでも民族革命の意氣に燃えた宣言中の言葉ではない。革命意識そのものが甚だ低調であつて、強いて言へば、傳統的な中國流の天命思想をつつましやかに述べただけで、中には元初の政治を謳歌する一節も見え、元軍のことを官軍とさえよんでいるのである。

後世から見て不可解の現象は、實は當時にあつては極めて自然な事態の推移であつた。もし矛盾を感じるならば、それは後世の讀者の方が悪いのである。抑も元末諸方に割據した英雄には社會のあぶれ者が多かつた。韓山童・韓林兒は邪教の祕密結社の教主であり、劉福通・徐壽輝はその流をくみ、陳友諒・明玉珍は更にその末流に屬し、明の太祖朱元璋も同

じ系統から出た。これに對する張士誠・方國珍は鹽密賣者である。これらの反體制勢力は特に異民族たる元王朝下であるが故に發生したものでなく、いかなる王朝の下にも常に存在していたものである。だから彼等の革命運動は單なる反體制運動の形をとって進行し、攘夷思想はもしあつても、利用されたに過ぎず、第二次的な意味しか持たなかつたのである。殊に朱元璋の場合、彼が相手として戰つたのは元軍よりも、自己と同じ經歷をもつた新興勢力に對してであつた。従つて攘夷思想よりもむしろ仲間同志における競争心の方が強かつた。このような環境の下に、上述の元帝に與うる書が書かれたのである。

元末における新興勢力が多く社會からはみ出したあぶれ者であつたことは、一般知識階級との間に微妙な關係を生み出した。知識階級は進んで彼等に加擔しようと思はず、彼等もまた知識階級を敵視した。明の李延昱の南吳舊話錄卷十九、任睢州の條に

元末亂離してより、世家甲族、毎に荼毒に遭う。吾嘗に恨々。

とあり、階級闘争の面が強く現われた。そこで中國人出身の官僚は、反つて元朝の忠臣として難に殉ずる者が多く、殊に科擧出身者がそうであつたことは、既に趙翼が廿二史劄記、卷三十、元末殉難者多進士の條で指摘した通りである。

この點が元明革命と辛亥革命との間で大いに異つた所である。由來、民族主義なるものもつばら知識階級の中に涵養されるものであつて、辛亥革命は書生の手によって達成された。然るに元明の際には、知識階級は叛亂軍に参加するのを屑しとしなかつたし、新興勢力もまた知識階級を利用しようとしなかつた。これが元明革命において攘夷思想の稀薄であつた一原因であらう。ただその間において明の太祖のみは、つとめて讀書人を幕下に招いて優待し、その獻策を利用したことがその成功の原因とされる。併しこれを事實に徴すると、彼といへども決して後世考えられるほど讀書人を尊重したとは思われない。彼が讀書人を待遇したのは漢の高祖程度であつた。中國流の文化國家の復活などは彼の眼中になかつたらしく思われる。だから折角、天子の位につき、洪武と年號を定めた際にも、正月元日という日を選んで大號令を渙發し

て國是を四方に頒布しようとせず、正月四日という日にそれを實施したのである。いつやってもいい仕事を、手のすいた時に極めて事務的に處理した、といった感じである。

二 元・明革命中の連續性

太祖は蒙古に對して、さまで攘夷的な敵愾心を有しなかった結果、蒙古的な氣風を知らず知らず、そのまま繼承するところが多かった。その中で比較的早く蒙古風の流儀を改めたのは、右を尙ぶという習慣である。洪武實錄卷二一、吳元年（一三六七年）冬十月丙午の條に

命じて百官の禮儀は、俱に左を尙ばしむ。右相國を改めて左相國となし、左相國を右相國となす。餘の官もかくの如くす。

とあり、これは洪武改元の前年で、蘇州の張士誠を平げた直後のことである。この時、左・右相國に任ぜられたのは李善長と徐達とであった。そしてこれはやがて翌年に天子の位につき、國號を立て改元する準備であったのである。

洪武改元の後、衣冠を唐制に改めたのは前述の如く、その二月のことであり、八月己卯に書籍・田器の税を除き、三年五月己亥に科擧を設けて士をとるの詔が發せられ、次第に開明政策が取られたが、併し直ちにそれで宋代のような文化國家が復活されたわけではなかった。蒙古的な武官を尙び、文官を賤める風はその後長く明の朝廷に残っていたのであり、それは太祖の政策に由來し、太祖の政策は元朝を踏襲したものに外ならなかった。

太祖の臣僚には李善長・胡惟庸・汪廣洋等を頭とする文官系統と、徐達・常遇春等の武官系統とがあったが、この兩者に對する待遇には判然と差別があった。洪武三年（一三七〇年）大いに功臣を封じた時、上席の左丞相李善長の歲祿は四千石であつたのに對し、次席の右丞相徐達は反つて五千石であつた。

洪武十二年、右丞相汪廣洋は死を賜わつたが、その妾の陳氏なるものが殉死した。調査するとこれは陳知縣なる者の女

で、没入されて奴婢となり、汪廣洋に下賜されたのであった。太祖は大いに立腹し、

沒官の婦女はただ功臣の家にのみ給す。文臣は何を以て給するを得ん。

といい、この分配に關係した左丞相の胡惟庸以下、六部の堂屬はみな處罰を受けた（明史卷一九六胡惟庸傳）。

この汪廣洋の罪狀は、劉基の毒殺疑獄に關して責任を問われたのであった。李善長、汪廣洋等は文臣とは稱せられるが、實際は胥吏的な事務官上りであるのに對し、劉基は文臣中の文臣とも稱すべき儒臣である。劉基は普通に太祖の開國佐命の功臣と稱せられるが、實はそれはずっと後世になってから定められたことにすぎない。洪武三年の功臣に對する賞賜を見ても劉基の歲祿は二百四十石で、これを武臣の棟梁たる徐達の五千石に比べると、實に二十分の一にすぎない。然るに後世文官が次第に勢力を得るようになってから、彼の死後の待遇が次第に向上した。正徳九年（一五一四年）には太師を贈り、文成と諡され、嘉靖十年（一五三一年）になって、武官の徐達が太祖の廟に配享されているのに對し、文官の代表として劉基が併せて配享されることになった。もし太祖が知ったならば苦い顔をしたに違いないのである。要するに太祖の時代、武臣が最も尊く、事務官上りの文臣がこれに次ぎ、儒臣が最も賤しかった。この三段階は何かしら蒙古時代の蒙古・漢人・南人の三階級を連想させるものがある。劉基、及び彼と並び稱せられる宋濂は共に東南の人である。文臣の輕視は太祖の後、相當長く繼續した。これは單に太祖の個人的な趣味によって生じた傾向でなく、當時の一般的な風尚であつたことを物語る。この風尚が次第に解消されてゆく經過を辿ることは、逆に太祖時代の狀況を知るため好個の手懸りとなるであらう。

胡廣は建文二年（一四〇〇年）の科擧の際の狀元及第である。成祖に迎降して重用され、文淵閣大學士となり永樂十六年（一四一八年）に卒したが、明史卷一四七、彼の傳に

禮部尚書を贈り、文穆と諡す。文臣の諡を得るは廣より始まる。

とある。當時の大學士は皇太子付の家庭教師にすぎなかったが、その皇太子が即位して仁宗となると、胡廣は少師を加贈

された。

張玉は元朝に仕えた武將であるが、洪武中に來歸し、靖難の役に成祖に従って戦死した。その子の張輔は英國公に封ぜられたが仁宗の時、その従兄の張信を帝に推舉した。張信は讀書人で、建文二年に鄉試第一に擧げられ、當時兵部左侍郎にまで進んでいた。仁宗は一見して氣に入ったと見え、武冠をとりよせてこれに冠らせ、錦衣衛指揮同知に改め、世襲を許した。明史卷一四五、張玉付傳に

時に開國を去ること未だ遠からず。武階重きが故なり。

と説明するが、文官よりも武官が重く、従つて文官から武官に改めるのが特典であるという考え方は後世からは理解できない。

次に黃福は洪武中の太學生出身で、後に成祖、宣宗の時に南京兵部となつた。明史卷一五四、彼の本傳に
英宗即位し、少保を加え、南京守備襄城伯（李隆）の機務に參贊せしむ。留都の文臣が機務に參するは福より始まる。
とあるが、實はこの時、黃福の方が李隆よりも官位が上であつた。併し職務として武官の李隆の方が上位なので、彼は常に李隆を正座にすえて自らその傍に坐した。そこで李隆の方でも、公務より退いた時には、黃福を上座に坐らせたという。後に參贊機務は守備より獨立して南京兵部尙書の兼職となり、これあるがために、南京六部の中で兵部が最も重職と稱せられるに至つた（明史卷七五職官志）。

このように武官が重んぜられたのは、明かに蒙古の影響である。元代には蒙古人は凡て軍籍にあり、夫々の身分に従つて將校、或いは下士卒として勤務しなければならなかつたが、明代はこの制を受けつぎ、百戸所鎮撫以上は世官と稱し、兵卒は軍戸世籍と稱し、夫々その地位を世襲したのである。後世から見るとこの軍務の世襲は甚だ窮屈な束縛であつたかの如く感ぜられるが、國初においては必ずしもそうでなかつた。それは軍戸は何よりも生活の安定を得たからであらう。明の太祖が諸子を分封した同姓封建制もまた元の封建を眞似たのであつて、漢のそれとは大いに性質を異にする。もつ

とも明實錄はこれについて次のような奇怪な事實を傳える。すなわち洪武實錄卷二五、洪武元年正月丙戌の條に

上文樓に御し太子側に侍す。因つて問う、近く儒臣と經史を講説するは何の事ぞ。對て曰く、昨漢書の七國漢に叛するの事を講ず。遂に問う、此れ曲直何れにあるや。對て曰く、曲七國にあり。上曰く、此れ講官一偏の説のみ。宜しく言うべし、景帝太子たりし時、嘗て博局を投げて吳王世子を殺し、以てその怨を激す。帝たるに及んで、又晁錯の説を聴き、輕意諸侯の土地を黜削す。七國の變、實に此に由ると。若し諸子のために此を講ずるならば、當に言うべし、藩王は必ず上天子を尊び、下百姓を撫し、國家の藩輔となり、以て天下の公法を撓むるなかれと(下略)。とあるが、これは話があまりよく出來すぎているから、恐らく永樂帝の時代になつて儒臣が曲筆でつちあげたものであらう。

明代の諸王は土地人民を支配せず、ただ歲祿を賜わり、莊田を所有する。外に直屬軍隊を掌握していて國防に當るが、これは元の封建制度の精神をそのまま繼承したものだと言つてよい。

太祖は文學の士を好まず、その毒手にかかつて殺された文士は、有名な高啓等多數に上る。元朝に仕えた官僚も例として處分を蒙つた。李延昱の南吳舊話錄卷一九、顧思聰の條に

洪武の年、元の故官は例として臨濠に徙さる。

とあり、元代に榮達した官僚の中で、歸順して太祖に重用されたのは危素ぐらいであつたと稱せられる。

併しまだ官位を得ない下級の胥吏は、恐らくそのまま身分を保持することを許されたと思われる。もし官衙から一切の胥吏を追放すると、その日から地方政治はたちまち停頓してしまふからである。王圻の續文獻通考卷五十に、掾吏顯擢姓名という條があり、洪武年間に吏員から兵部尚書になつた滕德懋以下の名を列する。この人は明史卷一三八楊思儀の條下の付傳にも簡單な履歷が載せられている。尤も此等の事實は文臣の地位が甚だ低かつたことを物語るものでもあるが、同時にまた吏員昇進の途が開かれていたこと、元代とあまり異ならなかつた證據とも見られるのである。

これと併せ考うべきは元代の白話聖旨のやり方がそのまま明代に受けつがれたことである。元代には必闡赤なる官が常に天子の側に侍して天子と大臣との問答を蒙古語で書きとり、これに俗語體の中國語譯を副えて發布された。その標本は元典章や、各地に残る聖旨碑によって見ることができ、明代でも天子の言葉はそのまま當時の白話體で書きとられたのである。もっとも此等は後世の記録にはすっかり書き改めて載せられるが、時には原形を留めて保存されたものがある。天下郡國利病書卷一八、蘇州稅糧の條に

(洪武) 六年八月奉旨。今年三月中。蘇州各縣小民缺食。曾教府縣鄉里接濟。我想那小百姓。好生生受。原借的糧米。不須還官。都免了。

とあり、さながら元典章を読むような感じである。この聖旨を寫したのは恐らく翰林院に屬する起居注官であろう。とまれ、これが宦官でないことは確かである。何となれば太祖は宦官に文字を習うことを禁じていたからである。この起居注官は洪武中に罷められたが、白話聖旨は其後も引續き存在した。永樂一八年、チムール王朝のシャハルクの使者が北京へ着いて、永樂帝に謁見したが、その際の見聞を次の如く記している。

玉座の左右に一人宛の美しい少女があり、髪を頭上に束ね、大きな眞珠の耳飾りをつけ、顔頸も露わしたまま、手に紙と筆を持ち、帝の發する言語を書き取らんと待ち構えている。天子の言語はかくして記録に留められ、この記録は天子が宮中に歸りたる後に進呈され、天子の添削を請うものとする。然る後にこれが詔書となつて、大臣の許へ届けられ、實行に移れる (Thevenot: Relations des Voyages, Tome IV. Ambassade de Schahrok etc. à l'Empereur du Khatai, Paris, 1683)。

と見え、この記録係りが果して女性であつたかは疑わしい。女官中に女史という職があつたが、これは王言を掌るものとは思われない。恐らくこれは宦官であり、司禮監に屬する秉筆太監、若しくは隨堂太監であろう。永樂以後は、國初の宦官に對する禁制が撤廢され、反つて重用される傾向にあつたからである。とまれ白話聖旨は其後も更に長く續いたのであ

り、祝允明の前聞記、妻代夫死の條に

成化十三年三月十六日。奉聖旨。是。都饒死罷。欽此。

の如き記事が見出される。王言の體裁の上でも明朝は元代の舊をそのまま受けついで點が多いのである。

太祖が蒙古に對して、果敢に民族鬭争を宣言することができなかったには理由がある。それはなお存續する蒙古勢力の強大なのを憚つたためである。清朝末期、滿洲族が殆ど完全に中國化され、その根據地たる東北三省すら漢化されたのと異り、内外蒙古はまだそのまま蒙古民族の住地であり、蒙古人の軍隊は華北の要地に駐屯して、その數は決して少なくない。蒙古語も公用語として十分な威嚴を保つていたこと、清末の滿洲語が死語と化したのとは同日の談でない。

太祖が張士誠を破つた直後、元の宗室神保太王等を北京の元朝廷に送還したことは前述したが、實は同時に河南にあった擴廓帖木兒の許に書を送っているのである。洪武實錄卷二十、吳元年九月戊戌の條に

閣下若し大義を存せば、宜しく師旅を整え、命を朝に聴き、四方の貢賦を京に入らしめ、或いは時に朝廷に赴き、君と共に大事を謀り、以て天下を安んじて可なり。然らずんば名は臣子たり、而して朝廷の權、軍門に専らにさる。たとい此の心、自ら以て忠となすも、安んぞ能く人議を免れんや。若し猶豫して決せずんば、恐らくは變部屬より生ぜん。事言い難きものあり。閣下果して君に忠ならば、當に赤心を以て之に事うべく、若し他圖あらば、速かに宜しく堅兵、以て境土を固めよ（中略）。即目諸軍屯駐して内に在り、間に居り銳を養う。閣下若し力を借らんと欲せば、但だ一使を遣わして至れ。即時調發して應援せん。

とあり、これは擴廓帖木兒に謀反を勧めた手紙であつて、蒙古君臣の離間を計つたものである。もちろんこれは實現しなかつたが、太祖の希望したのは蒙古が分裂してくれることであつて、若しも一致協力して抵抗されては困るのである。従つて蒙古が否應なく一致せざるを得なくなるように、中國人の民族意識を昂揚させ、攘夷思想を鼓舞するようなことは手控えねばならなかつた。彼は役にたたぬ觀念論に左右されるような空想家でなく、どこまでも利益を尊重する實際家であ

った。

幸いにして元朝廷は太祖が想像したより以上に疲弊していた。それは糧食の不足に苦しんでいたからである。元朝は毎年三百萬石前後の米を江南から海運で北京に運んでいたが、方國珍、張士誠が江浙の海岸を占據してから、南方の米が全然北上しなくなった。

太祖の洪武元年は、江南の海運が打撃を蒙り初めてから約十年ほど後に當るから、この間に年來の蓄積は大方使い果してしまったと思われる。そこで大將軍徐達等が大軍を率いて北征すると、蒙古人を含めて元の將士は、豫期した程の抵抗もなく、相率いて降参し、元の順帝は北京をすてて長城の北に逃れたのであった。ところで天子とその側近は蒙古へ逃げこんだが、困ったのはこれに従っていた多數の官僚、軍隊である。蒙古地方は面積は廣いが生産力が低い。到底多數の新來の客を容れるわけに行かない。また從來中國の内地に生活して、知らず知らずに中國様式に同化された蒙古人は、急に生活程度の低い遊牧生活に返ろうとしても無理である。一たび北方に走った蒙古人集團もまだ中國に未練があつて長城の附近を去りかねていたところを、再び明から攻撃を受けると、おめおめと降人になって出ざるを得なかつたのである。

太祖は此等の蒙古からの降人を北方の國境線に配置して防衛に當らせた。その中心は第四子燕王、後の成祖永樂帝が鎮守する北平府である。また詔して蒙古人と色目人たることを問わず、才能ある者を擧げて擢用するを許した。これは軍職のみとは限らないで、文職にも登用した。例えば洪武初年、廉州知府として政績をあげた脱因の如き者がある（明史卷一三八周楨傳）。

明史卷一五六は明初蒙古その他の諸部落の降人の列傳であるが、その贊に

明興り、諸蕃部は太祖の功德を懷い、多く樂いて内附す。姓名を賜い、官職を授くる者、勝けて紀すべからず。とあり、同卷中に見える吳允誠はもと蒙古人把都帖木兒であり、その歸付は永樂三年のことであるが、

帝思うに、蒙古人に同名多ければ、當に姓を賜いて之を別つべしと。尙書劉儁、洪武の故事の如く、編して勘合をなさ

んと請う。

とあり、新舊姓名の對照表を作成せねばならなかったのである。

太祖は單に降人の姓名を漢風に改めたのみならず、その血液の同化を計った。すなわち部族人同士の婚姻を禁止して、必ず中國人と結婚せしめたのである。併し此等の同化政策は必ずしも立法措置をまたないでも、自然に進行したのであることは中國の長い歴史が事實によって證明するところである。

通觀するに中國史上において文武官の地位がこのように顛倒した時代は、元代を除いて外にない。ということは、それが元代の影響によると解しなければ説明がつかぬことを物語る。當時の文臣、特に儒臣は武臣の狼戾なのを憎んだ。明軍の行くところ、元朝下の士大夫階級は何れも屠滅を蒙ったこと前述の如くであるが、これは彼等に同志的な好意をよせる明朝儒臣の默視できない蠻行であつた。元朝に仕えた進士たちが多く難に殉じたことは趙翼が既に論じたことであるが、この外に、或いは詩書冠冕の家、或いは元朝の臣子の誇りをもって夫婦ともに難に殉じた事實が、元史卷二〇一、列女傳に記されている。この元史列女傳なるものは極めて特異な文獻で、明の太祖の洪武年間に成りながら、明軍の蠻行を指摘した個所がある。

觀音奴の妻、卜顏的斤は蒙古氏にして宗王黑閭の女なり。大都が兵を被りしとき、卜顏的斤はその夫に謂いて曰く、我は乃ち國族、且つ年少、必ず人に容れられず。豈一死を惜しみて以て家國を辱しめんやと。遂に自縊して死す。時に張棟の妻王氏、家人に語げて曰く、吾は狀元の妻たり。義として辱めらるべからずと。井に赴いて死す（中略）。

安志道の妻劉氏は順州の人なり。志道及び劉氏の弟明理、並びに進士の第に登る。劉氏兵を避け、岩穴中に匿る。軍至り、之を汚さんと欲す。劉氏曰く、我が弟と夫と皆進士なり。我豈汝が辱を受けんやと。軍士兵を以てその體を磨す。劉大いに罵り聲を轢めず。軍怒り乃ち其の舌を鉤斷し、含糊して死す。

安謙の妻趙氏は大都の人。兵大都を破る。趙氏の子婦、溫氏高氏、孫婦高氏徐氏。皆姿色あり（中略）。皆井に赴いて

死す。

右の文中にある軍士は、賊と書いてないから明かに明兵である。場所が書いてないが、大都陷落の記事に挟まれているから、これも大都における出来事であつたであらう。これで見ると明軍の行爲は、列女傳の前の部分に記されている流氓のそれと少しも異なるところない。明史編纂に當つた儒臣たちは、この明軍將兵の無規律、殘忍に對し、欽定の正史という舞臺において、怒をこめて告發したのである。そしてこのような蠻行を制止しなかつた太祖の無關心に抗議すると共に、併せて何時までも下積みにされている文臣の鬱憤をも晴らしたのであらう。猜疑心の人一倍深い太祖であるが、そこは無學の悲しさで、こんな翻弄を受けたことに、つい氣付かないですんだ。洪武という時代は、このように何ともいへぬ異様な空氣のただよう世の中であつた。觀念的にばかり史を讀もうとすると、この間の眞相がつかめないであらう。

三 太祖の政策における元・明の斷絶

上述する所を總合して觀察すると、太祖の政治は初めから蒙古に對して民族革命を主張する意識が極めて低く、やがて舊來の蒙古風を改めたり、蒙古降人を同化したりする政策も、甚だ緩慢に極めて徐々にしか實施されなかつた。これを清末の激烈な革命思想に比べると同日の談でなく、従つて若し清末の例から類推して元・明革命を見ようすると大きな見當違ひに陥らざるを得ないのである。

併しながら中國人である太祖には、やはり中國人としての理想があつた。太祖が蒙古の遺風を知らず知らず踏襲するところが多かったとしても、一方には甚だ大なる相異が生じたのは當然である。太祖が意識して元代の舊に反して新たに採用した政策のうち、最も著しいのはその鎖國政策である。

從來は元王朝の下に中國・滿洲・蒙古その他近隣諸國を含めて、東亞共同體ともいふべき大なる通商ブロックが形成されてゐた。而して長い東亞の歴史上で常に敵對關係にあつた蒙古人・滿洲人などが、平和に且つ自由に中國人と貿易する

ことが出来た點が特に注意すべきである。然るに明の太祖はこの東亞共同體を解體し、中國をその中から脱退させて、中國人の中國、光榮ある孤立を宣言したのであった。このために東は朝鮮、南は安南、西はチベット・西域、北は蒙古が中國から分離して、單なる朝貢國とならねばならなくなった。

併しながら此等の諸國は歴史的に中國と密接なつながりを持っているので、全然分離してしまふことは不可能である。

特に彼等は中國と通商して、中國の物資を入手する必要があった。そこが實は明の太祖の覬い所である。中國と通商を希望する外國は、先ずその君長が明の主權を認めてその屬國となり、朝貢の義務を果すことを要求される。この朝貢に附帶して朝貢使隨員と中國人民との間の貿易が認可される。これがいわゆる朝貢貿易制度である。朝貢國となつた外國の君長はよくその人民を取締つて、中國及び中國友好國に對して非違をなさざる責任をもたねばならない。それは單に朝貢國という名分によるだけではない。中國から與えられた朝貢貿易という莫大な恩典を享受している德義に報いるべきだという義務を感じなければならない。何となれば中國は世界の中央に位し、その氣が中正であるから、あらゆる產物を所有して自給自足できるが、諸外國の風土は一方に偏して特殊な產物しか有せず、その國民が人間らしい文化生活を送るためには、必ず中國と交易としてその必需品を獲得しなければならぬ。貿易は中國で必要とせずして、諸外國にとって不可缺であり、従つてその許可は中國の外國に對する莫大な恩恵である、との理論である。既に中國は外國貿易を必要とせぬのであるから、中國人は海外に渡航する必要はない。むしろ紛擾を避けるために固くこれを禁止する。若し欲するならば、外國人の方から、中國へ出向いて貿易に従事すればよい。そこでいわゆる鎖國令が下されたわけであるが、鎖國とは中國の絶對的な封鎖を意味するのではなく、極めて嚴重な貿易統制と見るべきであり、我が國徳川時代の鎖國と略々同性質のものである。

明の太祖が鎖國政策を採用するに至つた動機は、彼が都を南京に奠めたことと關連をもつ。南京に近い江・浙の海岸は元代から、いわゆる倭寇の警が屢々報ぜられた地方である。而して倭寇なるものはその實、中國沿海の人民が日本人を誘

引して利用したものであることも周知されていた。これに對處する最も有効な方法は、中國と外國との人民を隔絶し、君主と君主との外交關係を主軸として、貿易をこれに附帶せしめるに如くはない。これが鎖國主義であり、朝貢貿易制度であつたのである。

これと同じ方法が、次に北方、蒙古・滿洲にも適用されることになった。明の太祖は萬里長城、及びこれに接續する遼東邊牆の線を華夷の境とし、この國境を保全して中國の平和を保ち、夷の故に華を勞せざるを念願した。もっともこの國境を防衛するためには、その外部に前進基地を設けなければならぬので、長城外にたとえば第十七子寧王を封じて大寧衛を設置したりせねばならなかったが、これを元代の四海を混一しようという政策に比べれば、著しく退嬰的である。

太祖の北方に對する退嬰策の原因の一は、その南京奠都が然らしめたのである。蒙古・滿洲は南京からは餘りに遠距離にある。この遠隔の蕃地を完全に内地化するはもとより不可能事であり、叛服常なき異民族を十分に威壓するためには、強大な軍隊を國境に配置しなければならぬ。かくては國內に南北二つの中心が発生する虞れがある。故に異民族内部の事件には深く立入ることなく、中國の安寧を主たる目的として、貿易の利を食らわせず、朝貢服屬せしむるを有利と考えたのであつた。

更に太祖の退嬰策の直接的原因是、洪武五年における大將軍徐達の蒙古遠征軍が、トラ河畔において、大敗北を蒙つたことによるであらう。向う所敵のなかつた徐達の大軍にして、數萬の軍を失つて敗退したのであるから、蒙古全土を平定することのいかに困難であるかは、太祖も痛い思い知らされたわけである。かくして周圍の異民族は、中國から一應分離された外國、乃至は朝貢國となり、中國は中國人の疆域を領土とした單一民族國家として、その中央部に首都を擁する新型の國家に生れかわつた。これまで中國歴史上には、南京を都とする統一國家は嘗て存在しなかつたのである。

四 永樂帝政治の回歸性

既に太祖の末年からその傾向が現われ初めていた文臣の擡頭は、次の建文帝の時代になって表面化してきた。この傾向は本來必然的なものであり、平和が恢復されると共に武官は働く場所がなくなり、中國社會文化の古い傳統は武を偃せて、文が興ることを待望する。ここにいう文とは胥吏的な實務の文ではなく、學問的な書香をもつ文のことである。そこで科擧出身の黃子澄・齊泰、さては宋濂の門生であつた方孝孺等が建文帝に用いられて國策決定に參與する新局面が生じた。併しこれは結果として失敗に終つた。太祖の方針を受けついで、なお武事を専途に勵んでいた燕王、後の成祖永樂帝のために壓倒されて、建文政權はあえなく没落せねばならなかつたからである。

成祖は太祖の第四子で、洪武三年に燕王に封ぜられたが、實際に北平に鎮したのは洪武十二年であつた。北平は言うまでもなく元の大都であり、遼金以來、北方民族が中國を支配するために設けた最大、最重要の軍事基地であつた。明の太祖はこの地を占領すると、逆にこれを以て北方民族を控制するための前進基地とした。そしてそこには多數の降人が配置されたのである。明史卷七七、食貨志に

徐達が沙漠を平ぐるや、北平山後の民三萬五千八百餘戸を徙して、諸府衛に散處し、籍して軍となす者には衣糧を給し、民となす者には田を給す。又沙漠の遺民三萬二千八百戸を以て北平に屯田す。屯二百五十四を置き、地を開くこと千三百四十三頃。

とあり、明史卷一二五、徐達傳によればこれは洪武四年のことであり、諸府衛とは北平近傍の地方であることがわかる。こういう土地であるから燕王の北平府は士馬精強と稱せられたのである。

併し太祖は燕王だけを特に強力に仕立てたのではない。山西には晉王があつて燕王に劣らぬ兵力をもち、また洪武二十六年、北平の北、喜峯口外の大寧に封ぜられて赴任した寧王は太祖の第十七子であるが、帶甲八萬、革車六千、その

勢いは燕王を凌ぐ程であるといわれた。明史卷一四五、陳亨傳に

北平は勢い弱くして、大寧行都司の領する所の興州・營州二十餘衛はみな西北の精銳なり。朵顔・泰寧・福餘の三衛の元の降將の統する所の番騎驍卒は尤も驍勇なり。

とあり、靖難の役において燕王が成功したのは、先ず彼が寧王を誑いて、此等の蒙古部隊を掌握した所に原因があった。燕王が建文帝政權を倒し、皇帝（成祖永樂帝）として北京政權を樹立すると、これは單なる主權者交替以上の政治革命を意味した。

永樂帝政權が、建文帝政權と異なるところは、その文臣政治を打倒して、太祖時代の武臣政治を復活した點にある。明史卷一四五、姚廣孝傳に

（永樂）帝の藩邸にあるや、接する所はみな武人なり。ひとり道衍（姚廣孝）のみ策を定めて兵を起す。

とあり、この道衍は太祖が選んで燕王に配置した僧で儒書に通じ、詩を善くしたというが、もちろん學者肌の儒臣ではなかった。建文帝を倒して即位した後、進士出身の解縉を用いたが、後に誅戮を加えた點も太祖の氣風に似た所がある。外に文臣、黃淮・胡廣・金幼孜・楊士奇・楊榮などを重用したといつても、それは祕書官、乃至は家庭教師以上のものではなかった。反つて重んずる所は、張輔・宋晟・吳允誠等の武臣にあった。

併しながら成祖の政策は、父の太祖と大いに異なり、殆ど百八十度の轉回を遂げた點がある。それはその對外姿勢が消極策から積極策にかわり、これに伴つて父の舊都南京を棄て、自己の封地北京を首都とした事實である。

太祖の北邊に對する消極策も、時には勢いに動かされて、積極策に一轉せざるを得ない場合もなかった。洪武二十年、二十一年に馮勝、藍玉等が大軍を率いて北征し、北元の丞相納哈出を降し、ついで北元主脫古思帖木兒を捕魚兒海に破つた如きはその例である。

併しその後、成祖の靖難の役の間に、北方蒙古に對する防備が手薄になったことは疑いない。幸いなことに當時蒙古は

二勢力に分裂し、東方には北元の後をうける韃靼部の本雅失里が實力者の阿魯台によって、西域のチムール大王の許から呼びかえされて擁立されており、これに對して西方には新興の瓦剌部が勢い盡んになりつつあった。

永樂七年（一四〇九年）、帝が本雅失里の許へ朝貢を勧めにやった使者が殺されたので、大將軍丘福をして北征せしめたところ、彼は敵の詭計に陥つて戦死した。翌年、帝自ら五十萬と稱する大軍を率いて親征し、西に向つて本雅失里を斡難河畔に破り、東に向つて興安嶺で阿魯台に打撃を與えてこれを降した。

東方韃靼部が明に破られて衰えると、代つて勢いを得たのが西方の瓦剌部であり、亡命してきた本雅失里を殺し、東に向つて韃靼部を侵した。永樂十二年、帝は瓦剌を親征し、忽蘭忽失温において大會戦し、火器の力によって大いに敵を破ることができた。瓦剌部はこれに懲りて、使を送つて謝罪歸服した。

然るに瓦剌が衰えると、再び強盛になったのが韃靼の阿魯台であり、西に向つて瓦剌を侵し、やがて明の邊境をも何うに至つた。永樂帝は今度は再び阿魯台に向つて討伐を加えねばならなくなった。

永樂二十年、帝は第三回の親征に出發したが、阿魯台は明軍との決戦を避けて遠くに逃れたので、殆ど成果が得られなかった。續く翌年の第四回、更にその翌年の第五回も空しく沙漠に大軍を往復させて示威運動を行なつただけに終つた。

併しながら中國人の天子が、自ら兵を率いて外蒙古に進出して戦つたということだけでも、長い中國の歴史において空前絶後の壯舉であるといわねばならぬ。漢の武帝や、唐の太宗は武威を漠北に輝かせたといつても、それは將軍を派遣して戦争させたのであつて、自らは都にあつて、遙かに聲援を送つていたに過ぎない。永樂帝が親ら五回に亘つて沙漠に出撃したについては、餘程の決心がなければならぬ。明かに彼の理想は父の太祖とは餘程異つたものであつた。彼の意圖するものは、中國人の中國ではなく、中國を中心とした東亞共同體の形成であつたに違いない。言いかえれば、これは元帝國の復活である。彼は自ら元の世祖の再來を以て任じたと見られなくもない。

このことは彼の對南方政策によつても傍證される。彼は安南の内亂に乘じ、兵を出して全土を平定した。この場合も、

安南の内亂は今に始まったことではなく、既に太祖の時から起っていたのである。太祖はこれを外國の事件として放任したのに反し、永樂帝は好機逸すべからずとして兵を進めて一舉に内地化を計つたのである。この安南は元の世祖が西藏を平定した時、部將兀良哈台をやつて征服させた所であつた。

永樂帝は安南に深入りしすぎたが、それ以上に蒙古に深入りしすぎた。自己が元の世祖の再來たるためには、何よりも全蒙古を支配下におかねばならぬからである。而してこれだけ蒙古に深入りすれば、必然の結果として北京に常駐して、ここを作戰根據地としなければならなくなる。かくして北京遷都が實現され、永樂帝はいよいよ元の世祖の後繼者たる色彩を強く打出すに至つたのである。

永樂帝は北京が創業の地であり、且つ戰略上の要衝であるから、即位の後もこれを見放すわけには行かなかつたので、永樂元年正月に、從來の北平府の名を改め、北京を立て順天府と名付けた。併し首都は依然として南京應天府であつたので、北京を行在と稱した。正統政府は南京におかれ、北京は政府の出張所、その六部は行在六部、すなわち行部でしかなかつた。然るに年と共に北京の比重が増してきた。永樂四年、北京新宮殿の建設が着手され、十九年に完成すると、南北の地位が逆轉し、北京が京師と稱せられるようになった。

洪武から永樂への變化は、單に永樂帝の個人的な趣好を以て説明さるべきではない。それは大きな東亞全體の動きを背景とするものであつて、元帝國は明によって滅亡せしめられたが、世界の大勢は元帝國の復活を必要と感じたのである。結局、明王朝が建國の理想に反し、自ら變質して元帝國の後繼者とならねばならなかつた。ただこの轉身が成功したか否かはまた自ら別の問題である。

五 結論 と 餘論

中國と蒙古と滿洲と、この三者を合した廣大な地域と人民とを結合して一つの共同體を形成することは至難の業であ

る。中國史上、一時的にそれが出現した例は度々あったが、それが永續した例は極めて少なく、これあるは元帝國を以て嚆矢とする。しかもそれは英主、フビライ汗世祖の手腕を以てするも、その一代の間には達成することができず、次代成宗の繼承の世を待たねばならなかった。

されば永樂帝がその在位二十三年の間に、元代の舊領域を恢復することができなかったからといって、彼の無力を責めることは當らない。併し其後の推移を見ると、彼の子孫の代においても蒙古を屈服させることのできなかった事情の中に、何かしら明王朝の本質的な弱點が露呈されているような氣がしてならない。

明王朝は太祖の個人的性格が示すように、根本的な缺陷を有していた。それは中國人の中國という民族主義風潮と獨裁君主制との傳統の波に乗り、これを利用した王朝的エゴイズムである。一王朝は自身を永遠に傳えたいという願望がある限り、エゴイズム傾向を有するのは當然であるが、さりとて明の場合は餘りに度が過ぎた。王室と光輝を爭いそうな功臣は、何の理由もなく片端から屠殺された。尤もこれは大局的に見て其後の社會の安定に寄與した點がないとは言えない。しかし家族を含めて功臣を殺戮しておいて、そのあと一家を各地に分封して王としたのではその効果が相殺されてしまう。況んや如何なる効果を伴ったことであれ、多數の無辜の人間を屠殺することは、人道上から許さるべきではない。

いわゆる朝貢貿易制度もまた、一方においては自國の人民を、他方においては外國の人民を犠牲に供して顧みない利己的な政策であった。通商貿易は人類の本能的に近い欲望といつてよく、いわゆる有史以前の古代から、世界の人類の間において、色々な形で普遍的に行われていたことである。これに統制を加えるのは、よくよくの理由がなければ認めらるべきでない。然るに明王朝は單なる政策の都合で、海外渡航を欲する自國の人民に絶對の禁止を命じ、渡來を欲する外國人民に苛酷な制限を科した。しかも王室が欲する時には、鄭和の遠征のような大規模な貿易巡禮を行わせた。莫大な國費を投じ、大動員を行い、そして獲物は凡て王室に歸屬するのである。明代のいわゆる倭寇なる現象は、この王朝エゴイズムに對する人民の反抗であつて、その犠牲者は外ならぬ人民であつたが、併し結局のところは、これが明を滅亡に導く一原

因となったことは間違いない。永樂帝の對北方政策も、ほぼこれと同じような事情を背景として行われたことを豫想して考察するべきである。

永樂帝が元の世祖の後繼者になろうとしてなり得なかったのは、もちろんその武力に限界があったことは疑いない。しかしただそればかりではなかった。何となれば彼は、東の韃靼部に對しても、西の瓦剌部に對しても、一度はしたたか打撃を與えて、これを歸服させるに成功したのであった。然るに彼等は間もなく叛き去って再び敵對するのであるが、むしろこの點に重要な問題がひそんでいるのではないか。

東亞の形勢は宋代以後の近世に入つて、中國周圍の異民族が、夫々旺盛な民族的自覺を起した事實が顯著に認められる。併しながらこの民族的自覺も絶對なものではなかった。政治・經濟・文化などにおける中國の優位を考慮すれば、自然にそこに現實的な政策の線が現われてくる。ただしもし中國があまりに身勝手な中華主義、中國のエゴイズムの態度を示せば、これに反撥せざるを得なくなるのは自然である。

韃靼部の阿魯台が、何故に永樂帝に反抗を企てたか、その間の事情はあまり明白でない。併し單に、夷狄は叛服常ならず、というような中國的な解釋では獨善すぎる。また單に政策の拙劣という以上に、異民族として我慢のできない傳統的な制夷策が暴露されて、彼等の憤激を買ったものでないか。中國は常に以夷制夷の故智を以て外國に望み、分割統治の希望をすてない。故に歸降者があれば、事情の如何を問わず收容する。阿魯台が叛去する直前、永樂十八年、九月乙酉のこととして、永樂實錄卷一一七に

韃靼の哈乂・脫歡・愛不干・廼馬歹等來歸し、願わくは京師に居らんと奏す。命じて哈乂を正千戸となし、脫歡を副千戸となし、愛不干・廼馬歹等を百戸となし、賜予すること例の如し。

とあり、既に先例があるのであれば、同様な納叛の事實はこの時に限られたものではなかったであろう。瓦剌も韃靼も、勢い盛んになると明に寇する傾向があるが、これは明の方でも、韃靼が盛んになれば瓦剌を助け、瓦剌が盛んになれば韃靼

を助けるといふ常套手段をとるので、これに對する反應とも見られるのである。

併し何よりも重要な理由は、永樂帝が父太祖の鎖國主義、朝貢貿易制度を、祖法という名分によって、そのまま踏襲した點に歸せらるべきであらう。外國人民の對中國貿易に對する強い欲求を人爲的に制限するならば、その代償として外國君長にはもっと寛大な特典を與えるべきであつた。たとえば宋朝が契丹に與えた歳幣、銀絹五十萬は、多額のように見えて、實は平和の代償として決して高價にすぎるものではなかつた。これはいわば後進國援助費の如き性質のもので、屈辱と考えるのは思い過ごしであらう。これに比べて明朝廷の外國君主に與える賜與は甚だ貧弱であつた。もっとも太祖は貧乏人からの出身であり、大亂窮乏の後に即位したのであるから仕方ない。永樂帝の時代には國運も隆盛に赴き、産業も復興したのであるから、もっと鷹揚に振舞つてもよかつたのである。彼は財政の使い方を知らなかつた。そして最後に外征のために莫大な浪費を強いられるに至つた。これも結局、その極端な王朝エゴイズムの當然の歸結であり、これを可能ならしめたのは、傳統的な中國の中華主義、その民族エゴイズムと、これに加うるに宋代以後の君主獨裁體制を以てしたためであつた。そして最後に、このエゴイズム政策の破綻から、王朝の滅亡への道を暴走する結果となつた。こういう點を指摘する歴史家が甚だ少いのは不思議である。

以下は餘論である。歴史には斷絶の面と、連續の面と、二つの面があるが、その外に回歸性の面がある。元・明革命はたしかに民族革命に相違なく、そこに大きな斷絶が認められる。併し如何なる場合にも、歴史上の斷絶には完全なる斷絶はありえない。必ずどこかに連續の面が残るものである。これを過去の歴史に見るも、唐代の律は王朝の交替に係なく、宋一代を通じて根本法典として用いられた。次に明以後の例では、大明會典が異民族國家たる清朝の初期に用いられたことは甚だ異様な感を與える。史料叢刊初編上に收められた天聰朝臣工奏議上に、天聰六年正月、高鴻中が刑部事宜を陳じたる奏に對し

上諭あり、凡そ事は凡て大明會典に照して行なえ。

と見えている。されば元・明革命の場合にも意外にも連續の面が強かったといつても、別に驚くに當らない。この革命は初めから意識された民族革命というよりは、結果として生じた民族革命であつたという方が適當かもしれない。従つて斷絶の面は極めて徐々に現われたのであつて、甚だ不徹底な點が後世まで殘されていたのである。

太祖が實施した最大の斷絶は、元代の東亞共同體から脱退し、中國人の中國に立籠り、鎖國を斷行した點にある。然るに次の永樂帝の時代になり、強い回歸性が現われて、再び元代のような東亞共同體の再建が企てられた。永樂帝はこの點で、元の世祖の再來ともいえる。類似的の現象は歷史上に屢々現われることであつて、スターリンはレーニンよりもピーター大帝に似、ヒットラーはカイザーに似た。日本でも尊王攘夷運動に始まつた筈の王政復古は、結局、東京へ都を遷して開國主義に轉向せざるを得なかつた。實はこのような斷絶・連續・回歸の展開の間に、その國の國民性が最もよく看取されるのである。過去からの斷絶を標榜する革命の中に意外な連續が存在しその斷絶もやがて、ゆりかえしの回歸に落付くという一種の法則は、單に過去だけでなく、現在にもまた未來にも出現するであらう。現今の中國も恐らくこの類型によつて説明される部分が多いのであるが、具體的に何が連續であり、何が回歸であるかは讀者の判斷に委ねよう。

(餘白錄) 燕雲十六州の地圖

近頃多く出た概説書の記載中、宋・遼時代の所謂、燕雲十六州の地圖ほど種々に誤っているものはないであらう。その原因は根據にされた箭内互博士の東洋讀史地圖のこの部分が、色を塗り違えていた爲である。抑も十六州の中、瀛・莫二州は周の世宗が恢復したが、次に遼の聖宗が宋の太宗から易州を奪取し、瀋淵の和約では現狀をそのまま承認したので、以後問題の地は實際には十五州だつた。營・平の諸州は勿論この外にある。空前の名著にして更に和田博士の校閲を経て、なおこの誤りがある。この頃概説書に筆をとること數次、著述の難きを歎ずるや切なるものがある。

(宮崎市定)